

管理者（技師長）の役割

佐野 幹夫

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



私が本会の副会長職の任を受けて1年半が過ぎようとしている。それまでの中日本地域理事として本会事業に携わる状況と、自分を取り巻く環境が一変した。勤務拠点を自医療機関に置き本会事務所に通いながら、期待に応えようとする自分と、力量のなさを嘆く自分が交差する日々であった。4年間の経験不足から、現中澤体制の運営幹事会の席上でも知らないことばかりの連続であった。会員の皆さんからお叱りを受けるかもしれないが、最近になってようやく事業展開の本質が、周囲からの教えもあり少しずつ継続的背景が理解できるようになってきた。これからも中澤体制の下、自分に与えられた役割を微力ではあるが、次世代を担う技師の皆さんに継承されるような事業に尽力していきたいと考えている。

さて、とうとう国民医療費が40兆円を超える見通しである。今まで国のさまざまな医療費抑制策に翻弄され、各医療機関はそのたびに対応策を講じてきた。しかし、少子高齢化の急速な進展、生活習慣病や多疾患の合併・慢性化などの疾病構造の大幅な変化、医療技術の発展に伴う医療ニーズの急速な変化など、医療を取り巻く社会環境の変化が医療費高騰の背景にあり、増加する割合は国の予測を上回る勢いである。このため来年迎える診療報酬改定が非常に厳しいものになると予想される。さらに2年前の消費増税の影響を受け、予想以上に各医療機関の経営が厳しい状況にある。特に大規模な医療施設ほど医療材料の購入や大型装置の購入など、消費増税による影響が顕著に出ている。

このような医療情勢の中で、放射線部門を管轄する管理者（技師長）のこれから果たす役割はとても重要になる。全国の会員の皆さんの中には、病院経営に参画している技師長や院内の他部門を管理している診療放射線技師など、マネジメントに従事する人材も多く存在している。管理者として部門を預かれば、組織をつくり上げなければならない。それも中長期的の展望を見据え、到達目標を明確に掲げる必要がある。さまざまな動向に敏感に反応できるよう自身を磨く努力を怠らない。そして管理者は、既存の概念にとらわれることなく、ブレない覚悟と決断力が必要不可欠であり、自身が管理者となった瞬間から後任選びも始まる。多くの皆さんが属している医療機関は、地域社会・住民に対し、その存在意義の上に成り立っている。経営的視点から患者や地域住民のニーズに応える責務があり、国の動向（診療報酬改定）には大いに関心を持つべきである。

医療における組織の特徴は、特に病院内において二重権限構造を成す。通常業務を遂行する場合、医師からの指示で医療従事者であるスタッフが行動する。しかし、時として上司からの指示とのはざままでスタッフが戸惑う場面も出てくる。その場合、管理者は事象によってはパワーバランスが働いていないか確認が必要となる。そして忘れてならないのは、医療機関の組織は専門集団の集合体であり、セクショナリズムが部門間に発生しやすい環境にあるため、管理者は他部門とのコミュニケーションを図る必要がある。

本会の教育委員会が現在準備を進めているクリニカルリーダー・マネジメントリーダーにより、会員自身の知識や技術水準の位置付けが明確となり、自己啓発につながるものと確信している。その結果、他施設への異動の際に個々の力量が正当に評価される時代が訪れることを期待している。それには今後、各医療施設の管理者（技師長）育成に向けた理解と協力が必要不可欠となろう。

本年度のマネジメントセミナー開催のお知らせ（平成28年1月30日・31日の2日間）

例年通り、大阪の国際交流センターで行います。詳細は後日、会誌に掲載致しますので、多数のご参加をお待ちしております。*問題解決は参加者全員で考えるがモットー